

よろこび

聖徒のための情報誌

今月号の内容

『節分』を通じて(1面)
日蓮大聖人の歩まれた道
よろこび佛教語解説(2面)
法華経のお話⑧(3面)
三浦恵伸総合研究所副所長
講演会のご紹介(4面)

平成24年(2012年)2月1日(水)
2月号

発行所
〒873-0002
大分県杵築市南杵築1539番地
妙経寺内

日蓮宗霊断師会

会長 新聞 智雄
日蓮宗霊断師会事務局
電話 0978-62-3570
FAX 0978-62-3571

編集人 松本 恵昌
購読料 1部 105円
毎月1回1日発行

日蓮宗霊断師会ホームページ
<http://www.yorokobi-reidanshikai.jp>
よろこび投稿メール
yorokobi@yorokobi-reidanshikai.jp

節分の意味

節分とは、季節を分けると書き表す通り、古来、各季節の始まりの日である立春、立夏、立秋、立冬の前日を指しておりました。江戸時代以降、特に立春の前日を節分と示す場合が多くなったようです。これは冬から春に移る時期を一年の境目とする感覚から、現在の大晦日と同じように考えられてきたこと発すると思われるます。

御書の中の四季

『報恩鈔』には自然の節目として、「春は花咲き秋は果なる夏は温かに冬は寒たし」とあります。節分は一年の節目の中にしっかりと身を置いた風習と言えらるでしょう。他にも御書を見渡しますと「浄飯大王是を歎き、四方に四季の色を顕して、太子の御意を留め奉らんと巧給ふ。」

守護を信じる

この節目の大事に、支えとなり頼りとなるのがお題目、九識霊断法、俱生神月守です。信行生活の節目として一日の始

「日月天にまします。須弥山いまもくづれず。海潮も増減す。四季もかたのごとくたがはず。」と示されております。日天も月天も、ともに厳然として天にいらつしやるのです。須弥山は今も崩れずにそびえ立ち、海潮も昔からずと干潮・満潮をくり返して、春夏秋冬も正確にやって来るのです。冬は必ず春となることを疑うことがないよう、法華経の行者へのご守護を難く信じて精進しなくてははいけません。

節分を季節の節目というだけでなく、良き人生の為の良き節目として、これからも日々お題目を口に唱え、俱生神月守をしつかりと身に帯し、判断がつかなければ九識霊断法によりご本仏様のご指示を仰ぎ、宗祖の意に叶う人生を過ぎて参りましょう。

イラスト 小川けんいち



霊断師会組織局局长
名古屋市 本成寺聖徒団团长
天野 淳

二月三日は節分、日本人の生活の中でも大切な節目の日であり、豆まきなどの行事を通じて家族の絆を確認する日でもあります。本会組織局局长・名古屋市本成寺聖徒団团长の天野行淳師にその意義を解説して頂いた。

『節分』を 通じて

無病息災を願う大事な節目



に沈み、氷に閉られ、炎にしばむ。但し仏性の蓮華は不然、三世無辺の花なれば春夏秋冬常葉なり、遍一切処の蓮なれば六趣三有に遍く開く。」

『当体蓮華鈔』
このように日蓮大聖人様の御書の中には、実に様々な四季に関する記述がありますが、その壮烈なまでのご生涯の中には、立教開宗・ご法難・身延入山等々、四季の移ろいのごとく節目となった出来事がいくつもあつたのです。

今、私たちの人生にもまた、様々な節目があります。誕生・入学・卒業・就職・結婚……
日々の暮らしにおいても、起床・通学・通勤・炊事・洗濯・買い物……

私たちは刻々の生死、日々の生死、年々の生死、一生の生死、永遠の生死を過ごす以上、多くの節目を通過し、時には迷い、時には立ち止まり、時には振り返って生きていくのです。

まりは仏壇でお参り。月の始まりは盛運祈願会に参詣。年に一度は総本山身延山へお参りしたいものです。本年は五月十二日(土)・十三日(日)に第四十七回全国結集身延大会が開催されます。信仰の良き節目として、多くの皆様の参加をお待ち致しております。

節目は、振り返り反省をする機会にもなります。ご守護を疑ったり、過分なご利益を願ってはいけません。

大聖人様は『開目鈔』に、「日月天にまします。須弥山いまもくづれず。海潮も増減す。四季もかたのごとくたがはず。」と示されております。



津軽宇田山 閻法寺

2月19日 午前10時半より
「副住職帰山式」
毎月 最終日曜日「盛運祈願会」

〒030-1403
青森県東津軽郡外ヶ浜町平館元宇田52-2
TEL 0174-25-2712

住職 工藤 堯幸
副住職 工藤 堯慎・修徒 工藤 堯顯

日蓮宗 東光山妙正寺 聖徒団

2月5日(日) 午前11時 節分厄払祈禱会
釈尊涅槃会
毎月1日午前10時「盛運祈願会」

妙正寺聖徒団 团长 関 龍雄
〒071-1423
北海道上川郡東川町東町2丁目6-3
TEL 0166(82)2714
FAX 0166(82)2914

いかされるよろこび

美濃乃國
常唱寺 聖徒団

〒501-3734
岐阜県美濃市千畝町2738-2
TEL/FAX 0575(33)1430

妙顕寺

本山 佐野 日蓮大聖人御真骨奉安

齊藤日軌貫首著
「日蓮宗の戒壇、その現代的意義」
国書刊行会

CD「感謝百万遍陀羅尼」
CD「ないないブルース」

好評 発売中!

〒327-0843
栃木県佐野市堀米町264
TEL 0283-22-1524
FAX 0283-22-4194
<http://www.sano-myoukenji.jp>

日蓮宗霊断師会会長
感通寺聖徒団团长
新聞 智雄

〒162-0044
東京都新宿区喜久井町39
TEL 03-3209-8782
FAX 03-3208-7966

清道衆講習会開催

東京都新島・長栄寺において

平成二十三年十一月十三日、東京都新島・長栄寺聖徒団（光枝海元团长）において「清道衆講習会」が開催された。これは同聖徒団の「お会式法要」に併せておこなわれたもので、本部からは講師として末吉観道副会長、建光行総局長が出向。仏教の生い立ちから釈尊の教え、日蓮大聖人のご本尊についての講義を四講にわたっておこなった。

この日、久しぶりの講習会に湧いた同聖徒団。参加者から「判り易く丁寧に解説していただき、御本佛様に生かされている自分が、み佛の子として、日々、どの様な心構えで生きていかなければならないのかを、改めて教えていただいた」との感想が多数寄せられ、大きな感激の中で大聖人様への報恩感謝と、お題目信仰の有難さを一層深めた有意義な一日となった。



講師先生と参加者

(報告) 東京都新島・

長栄寺聖徒団 光枝妙珠

北海道北東・東川町妙正寺において

前日に地元月刊誌の取材、翌日にラジオ出演

平成二十三年十一月二十七日、北海道東川町・妙正寺聖徒団（関龍雄团长）において、三浦恵伸講師（本部総合研究所副所長）が出演して、通算八回目となる「清道衆講習会」

が開催された。受講聖徒は三十五名。三浦講師は、講習会テキスト「みおしえ」を用いながら、この度の東日本大震災で御自身も被災された自坊・岩手県善慶寺聖徒団での尊い体験をもとに、大津波の映像や被災生活の写真を交えながら、この未曾有の大難の中で、数多の方々の方々の哀楽と共に生きた霊断師にしか語れぬ渾身の講義をおこなった。

「災害が、いつ何処でどのような起こるか分からない現代に於いて、霊界に在る生命の御親との交流を深め、絆を強くして、人類の生命活動を正しい軌道に乗せ、この地上に本来の浄土相を顕現させる光と力のシステムをよく学び、霊化生活を普及させる事がこの講習会の開催の目的である。（講義より）」

受講聖徒は、講師の説く一言一言をよく肝に命じて皆共に霊化生活実践の誓いを立てると共に、続いて平成二十四年も、第九回目となる「清道衆講習会」を開催して頂きたいとの要望を寄せて、この大いに実りある講習会を円成した。

なお三浦講師は、講習会前日の二十六日には、地元月刊誌の取材を受け（関連記事四ページ掲載）、講習会翌日であった二十八日も地元ラジオ局「FMリバー」の番組に出演して、五十分にわたり「清道衆講習会」、東日本大震災での御自身の体験と実情についてお話をされ、これはこの地域に大きな反響を呼んだ。

一日伝道報告

広島県 福山市壽泉寺において



本部伝道局長・濱田壽教講師

「俱生神月守」の勧め

平成二十三年十月一日、広島県・壽泉寺聖徒団（根師哲郎团长）において、お会式法要（日蓮大聖人御報恩会式法要）に併せて「一日伝道」が開催され、本部から濱田壽

教講師（本部伝道局長）が出向した。当日の参加聖徒は約五十名。お会式法要に引き続き開催された「一日伝道」では、濱田講師による『お会式と小松原法難』についての法話がなされ、「俱生神月守の神秘」についてお話が及んだ法話後半では、まさに笑いあり涙あり、濱田講師の人柄を滲ませる優しく温かな語り口調から醸し出される珠玉の言葉に、参加聖徒は皆一様に感動の時を過ごした。更なる信仰心を深めた一日となった。（報告 広島県・

壽泉寺聖徒団团长 根師 哲郎）

第九回 よろこび 佛教語解説



総合研究所・霊研主任 新聞 信應

「忍辱波羅蜜」

今月は「忍辱波羅蜜」と云う語です。「んにくはらみつ」と読み、同義語で『辱提波羅蜜（せんだいはらみつ）』または『忍波羅蜜（にんはらみつ）』とも言います。忍辱とは、あらゆる苦難に耐え、忍び、許し、そして認めるという意味です。もしかしらば本佛は、大きな意味でこの「忍」の修行を、常に私たちに与えて下さっているのかもしれない。

しかし、そんな私たちは、周りの人達の生活を羨み、嫉んだりしてはいないでしょうか。私たちが



生きて行く上で、誰も彼もが平等というものは、なかなかないのが現実です。また人生において、全てに満足できている人は、そう多くはないでしょう。傍から見れば幸せそうな家庭でも、実は何かしらの悩みを抱えているかもしれません。「もつともつと今より良くしたい」と願う意欲は、明日を作り出す活力となりますが、それが過ぎると強欲となり、とかく自分の事しか見えなくなり、やがては忍ぶことや人を許すこと、人を認めることも出来なくなり、そして何よりも大切な感謝の心を忘れてしまうのです。

イラスト 小川けんいち

第十回 日蓮大聖人の歩まれた道

清澄寺ご入山（その二）



総合研究所 教学研究部長 小泉 輝泰

「予はかつしろしめされて候がごとく、幼少の時より学文に心をかけし上、大虚空蔵菩薩の御宝前に願を立て、日本第一の智者となし給へ。十二のとしよりこの願を立つ。その所願に子細あり。今くはしくのせがたし」（破良観御書）

かくして清澄寺への入山を果たされた善日磨は、改めて師となった道善御房により「葉王丸（鷹）の稚児名を授けられました。そして当初の「所願」を果たすべく、山内の誰もが驚くほどに勉学に打ち込まれたのです。

その傍らには、入山に際して生家より送られた品が、常に寄り添うように置かれていました。それは清澄寺宝物として今なお大切に保管されている、硯箱と筆箱です。小さな水差しを添えられた硯は、表裏に竹林の虎や撫子などの見事な時絵が施された硯箱に収められ、樺の玉木で作られた筆箱にも、同じく大変上質な品々が見事に施されています。その見事な品々を送り出さなければならなかったご両親の、切ない思いが伝わってくるようです。

それにつけても、今でさえ高価であるこれらの品を用意するための必要としたのでした。この品に留まらず、清澄寺入山に当たっては、当然ながら金品を含め大変な支度が必要であったと思われま

さまの出家得度以降も深い縁を持つ方ですが、ご自身の幼少期よりご両親も含め大変な恩義を受けられたと思しきことを、ご消息（お手紙）などでしばしば語られています。

ではなぜ領家の尼は、それ程までに貫名一家を援助し続けたのでしょうか。おそらくは金銭援助のみならず、自身の領内である清澄寺入山自體にも、斡旋をされていることと思われる。そこまで助力をされている人物ながら、残念ながらその理由は定かではありません。と言うよりも、領家の尼の存在自体に謎が多く、ただ領主であった夫を亡くした後家尼であったこと以外はその名前すら正確には分かっていないのです。

しかしながら、武家の新興勢力である地頭に対して、「領家」つまり御領地を拝領している莊園主は、公家勢力との強いつながりを持つ者たちであることは確かです。実はそのことに貫名家との不思議な縁があったのでは、と考えるべきではないでしょうか。

これらの人々との不思議な縁と、日蓮さまのお生まれになった時代、そして目まぐるしく移り変わる世の有り様など、全ての事柄が幼き子の心中で所願として一つの道を示し、善日磨に新しい、そして大きな第一歩を記させたのかもしれない。

次回はそのようなお話にも触れてみたいと思います。

イラスト 小川けんいち

年始広告

震災復興御支援有り難う御座います
日蓮宗霊断師会理事
善行院聖徒団团长

田口 恵悠

〒九七一―八二〇一
福島県いわき市小名浜岡小名字住ヶ谷二五
TEL〇二四六―九二一三三二七
FAX〇二四六―一五四―八四三六

法華経のお話 ⑧



総合研究所主任
塩入幹丈

無量義経の段 その七

「一時佛住。王舎城。耆闍崛山中」

佛様が居ます世ならば必

ず説法の場所とされ、無佛の

時代ならば聖者が修行の場

とし、さらに聖者もない世

ならば鬼神や精霊が棲み家

とする、聖も魔も訪れる霊

地。

まさに善も悪も超え全て

を救う法華経にとって、最も

ふさわしき舞台。それこそ

が王舎城（マガダ国首都）の

丑寅にそびえし山、耆闍崛山

すなわち靈鷲山だったので

す・・・。

①億は億でも

靈鷲山のある王舎城には当時、九億の家があったといわれます。

「それってめちゃ多すぎ！すわ捏造！」と突っ込まれる処でしょう。が、実はこれ、億の単位が現在とは違っているのです。

今でこそ億が千万の十倍というのは世の常識。ですが実は近世以前においては、万以上の単位は地域や時代によってバラバラだったのです。

ですからここでも億は千万の十倍ではなく万の十倍、つまり今の十万を意味する単位だとのこと。要するに王舎城の世帯は九十万だったわけ

です。それでもこれだけ多くの人たちが、お釈迦様と同時代、佛教最大パワースポットの近くに住んでいたわけですから、「僕には教えを学べる場所がある。こんな嬉しいことはない……」と皆がみな喜んでいただろうなく羨ましいなと、末法万年に生きる私たちとしては思ってしまう処でしょう。

が、そう甘くはないのが現実の悲しい処。実は王舎城全世帯の三分の一、つまり三十万もの世帯はお釈迦様を見奉ったこともなければ、その噂すら聞いたこともない状態。まさに「佛教など知らぬ！通じ

ぬ！」と、完全に縁もゆかりもなかったそうです。

そんな可哀想な人たち（本人たちに自覚がないのが可哀想さをさらにパワーアップしていますね）をまとめて「舎衛三億」と申します。

情弱な方々へのネーミングにしては、何だかカッコいいですね。

②舎衛三億

では後の六十万世帯は佛教と縁があつたのかというと、さにあらず。

その半分の三十万世帯の人々は、ただお釈迦様のことを聞いただけにどどまり、あと半分の三十万世帯だけが、やっとお釈迦様を実際に見ることができたそうです。

しかも一概に見るといっても、そのパターンは千差万別のはず。有り難い方だとおがみ拝する人もいれば、興味もなくチラ見しただけの人や、新興宗教だ、胡散臭さいなーと見た人もいることでしょう（聞くだけの場合も同様でしょう）。

結局、王舎城九十万世帯中、お釈迦様を佛様だと認識できた人の数は、はなはだ少数だったことになるのです。

『娑婆の栄花は夢の夢、楽しみ栄えて何かせん。人身は受け難く、佛教には遭い難し』とは「平家物語」の有名な一節ですが、これはお釈迦様と同時代、同じ国の同じ街に住んでいた人々にも、当てはまることだったのです。

思えば、そんな会い難き佛教の中でもさらにさらに会い難き日蓮佛教に出会えた私たちって、宝くじの一等にあたることよりも何万何千倍も難しいチャンスに恵まれているんですね。

是が非でも、このチャンスを生かしたいものですね・・・。さて、こうした因縁由緒ゆえに、お釈迦様はここ、王舎城は靈鷲山（耆闍崛山）の山中で説法されたわけですが、実はこの山の「中」にお入りになるということそれ自体にも、ある特別な意味があるのです。

③お釈迦様のお好みは「中」
教科書の定番、宮澤賢治の「永訣の朝」の有名な一節
『おまへがたべるこのふたわんのゆきにわたくしはいまころからいゆる
どうかこれが兜率の天の食に変わってやがておまへとみんなとに聖い資糧をもたらすことを』
で兜率天のことは皆さんもお馴染みでしょう。

兜率天とは六欲天（人の目には見えない天界のうち、地球に近い空間に存在する六つの天界のこと）の内、地球から四つ目に当たる天界のこと。あの弥勒菩薩が五十六億七千万年後に弥勒佛として地球に降臨されるまでの、最後の調整のため修行を



されている処です。

実はお釈迦さまも印度に降臨されるまでは、ここ兜率天にて最終調整に励まれていました。

兜率天よりも地球に近い三つの天界には、まだまだ煩惱は多いけれど、佛教への信仰は篤い神々が住し、逆により遠い二つの天界には、レベルは高いけれども、佛教とは距離を置く神々が住しています。

その二派に別れる六欲天のうち、ど中間にあたる故に、兜率天は別名、中天とも申します。

その中天からお釈迦様は、東洋と西洋の中間にあたる中国（この場合、漢民族の中国に非ず）の印度へ、中日（十時から十四時）に降臨され、煩惱まみれの王宮の生活からも、禁欲ばかりの苦行者の生活も離れた中道の修行で悟りを開かれ、最後は中夜（二十一時から一時）に涅槃（佛様がお亡くなりになられる）された。

一生の大事な節目節目に中を現わすことで、お釈迦様は中道の教えたる佛教を私たちにお示しくださるのです。故に最も大事なことを説かれる時も、まさに山の「中」にお入りになれるわけです。

イラスト 小川けんいち

「みおしえ」研修会報告

愛知県名古屋クラウンホテルにおいて

昨年十二月十三〜十四日の二日間、名古屋市・名古屋クラウンホテルに於いて『みおしえ』研修会が開催された。内容はお会式についての法話実習で、参加者は、靈断法並びに「俱生神月守」の御守護の有り難さを自分自身の体験談を取り入れながら真剣に実習。審査役の講師陣からは、実習参加者それぞれに、法話がより上達するようにとの思いを籠めた優しく厳しい指導がなされた。

研修会終了後、参加者からは「大変緊張した勉強会で、このような研修の機会があれば、また参加したい、大変有り難かった」との声を多数寄せられた。



この研修会は、人材教育の一貫として、参加者の資質向上を目的に、これからも開催する予定である。

参加者は、新聞智雄会長はじめ、末吉観道・建光行・齋藤朋久・三浦恵伸・戸田教栄・濱田壽教・廣田学良の各講師、品田祥皓・吉田憲由・飯盛義教・工藤堯頭・光枝妙珠・新聞正興・三浦恵導・戸田雅子・山村妙利（以上、敬称略）の計十七名であった。

報告 本部 飯盛義教

